

佐賀大学美術館

THE SAGA UNIVERSITY ART MUSEUM

平成28年度 年報十紀要

2016



ART EDUCATORS
IN SAGA
EXHIBITION



2016
5/20
7/10

佐賀の
美術教師たち

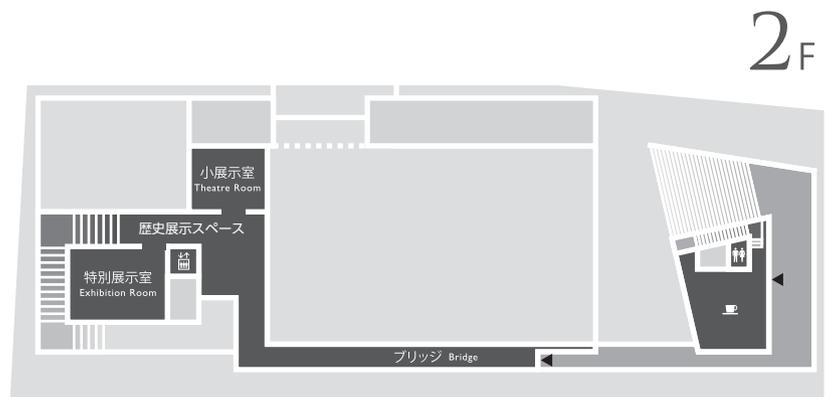
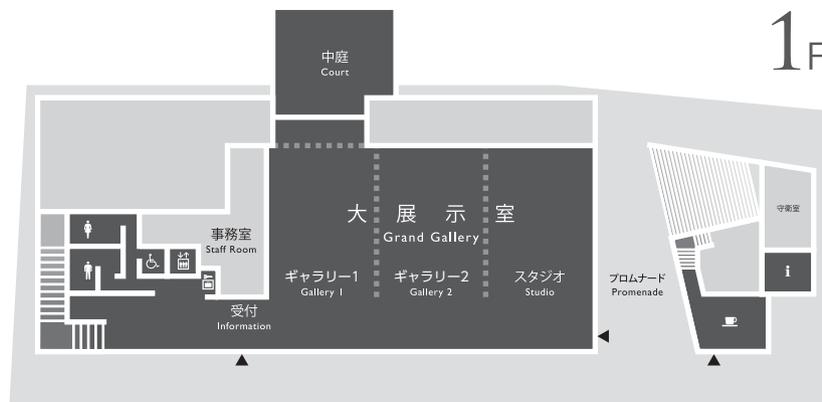
10:00-17:00
9:00-17:00
10:00-17:00

佐賀大学美術館

佐賀大学
SAGA UNIVERSITY

〔館概要〕

名 称	佐賀大学美術館
所 在 地	佐賀市本庄町1番地
基本設計	佐賀大学
実施設計	(株)梓設計九州支社〔協力：(株)ワークヴィジョンズ〕
監 理	佐賀大学環境施設部
施 工	建築：金子建設(株) 電気：(株)佐電工 機械：(株)九電工
構 造	鉄骨造・地上2階建
延床面積	1,502㎡（最終図面に基づき、数値を修正）
展示面積	462㎡ 展示室1 106㎡ 展示室2 106㎡ スタジオ 111㎡ 特別展示室 48㎡ 小展示室 34㎡ 歴史展示スペース 57㎡
そ の 他	プロムナード 中庭 ブリッジ
設 備	トイレ 多目的トイレ ロッカー
併 設	カフェ



〔沿革〕

- 平成23年 1月 4日 学長年頭挨拶で美術館設置計画を発表
- 平成23年 6月 8日 佐賀大学役員会にて美術館設置諮問委員会からの答申書を報告。
美術館の設置を審議・了承。同時に3WG（設置募金、利用、建設）についても報告
- 平成23年12月20日 美術館基本設計建設コンサルタント選定委員会で基本設計コンサルタント選定
- 平成24年 2月22日 佐賀大学役員会にて基本設計のイメージを説明、募金趣意書の作成を提案・了承
- 平成24年 5月14日 基本設計納入
- 平成24年12月29日 美術館実施設計終了
- 平成25年 2月14日 新営工事起工式
- 平成25年 6月26日 美術館規則、美術館運営委員会規定制定
- 平成25年 8月30日 美術館建設工事竣工
- 平成25年 9月28日 佐賀大学統合10周年記念式典・佐賀大学美術館開館記念式典
- 平成25年10月 2日 一般公開開始
- 平成26年10月24日 入館者 5万人達成
- 平成26年度 第18回佐賀市景観賞受賞
- 平成28年 2月19日 入館者10万人達成

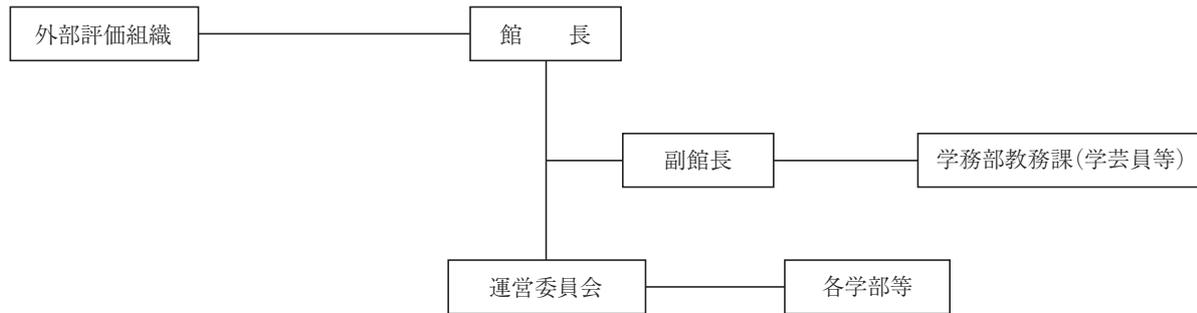
〔設立主旨〕

平成25年10月、旧佐賀大学と佐賀医科大学の統合10周年記念事業として佐賀大学美術館は誕生しました。美術館と、併せて整備された正門エリアは、「地域に開かれた大学」という佐賀大学の理念を象徴するものです。美術館は、総合大学である佐賀大学の魅力を多方面に向けて、より多くの人に知っていただくための情報発信源として活用されています。

〔活動目的〕

佐賀大学が所有する資料や、美術・工芸に関連する作品を収集・保管・展示するとともに、文化芸術の新しい活動や表現を地域の方々とともに作り上げ、総合大学が生み出すさまざまな研究成果を周知・公開していきます。

〔組織図〕



〔職員〕

館長	後藤昌昭
副館長	田中嘉生
主任(学芸員)	佐々木奈美子
事務員(再雇用)	西村彰
事務補佐員(学芸員)	大坪由季
事務補佐員(学芸員)	鬼塚美津子
事務補佐員(学芸員)	今村真由美

平成29年3月31日現在

〔運営委員〕

委員長(館長)	理事	後藤昌昭
副委員長(副館長)	教授	田中嘉生
委員	准教授	和田学
委員	教授	田中右紀
委員	教授	平地一郎
委員	准教授	村田尚恵
委員	准教授	後藤隆太郎
委員	教授	白武義治
委員	学務部長	下川洋司
委員	佐賀大学 同窓会長	金丸安隆
委員	教授	荒木博申
委員	財務部長	井上敏昭

平成29年3月31日現在

目次

[年報]

- 3 ——— 館概要
- 4 ——— 沿革
- 5 ——— 組織図
- 7 ——— 平成28年度の活動
 - 1. 展示記録（主催）
 - 2. 展示記録（企画申請）
 - 3. 実習・研修
 - 4. 刊行・掲載・見学
 - 5. 寄附
 - 6. 職員の館外調査研究・研修等
 - 7. 新収蔵作品
 - 8. 入館者一覧表

[紀要]

- 37 ——— 久富邦夫をめぐるふたつの企画展
 - 「修業」と「創造」
 - 大坪 由季（元 佐賀大学美術館 学芸員）

〔平成28年度の活動〕

平成28年 3月21日 「芸術地域デザイン学部開設記念展― 芸術で地域を拓く、芸術で世界を拓く」(～5.8)

3月21日 「久富邦夫〈東京〉― 太宰と出会った修業時代」(～7.10)

以上、前年度より継続

5月20日 「佐賀の美術教師たち― 地方画壇の成立と美術教育者」(～7.10)

7月23日 「佐大の工芸」(～11.20)

11月24日 「久富邦夫〈佐賀〉― 創造の旅」(～3.25)

1. 展示記録（主催）

芸術地域デザイン学部開設記念展「芸術で地域を拓く、芸術で世界を拓く」

《展覧会概要》

平成28年4月に開設された芸術地域デザイン学部を紹介する展覧会。

柳健司氏（ミクストメディア）による立体作品や、杉本達應氏（情報デザイン）によるパネル展示、土屋貴哉氏（コンテンツデザイン）による映像を用いたインスタレーション等、4月に着任した3名の教員の作品を中心に、新学部の全教員24名の作品や研究成果を紹介した。

会期中にはその3名の教員によるギャラリートークを開催した。

《会期》平成28（2016）年3月21日（月・祝）～5月8日（日）

《開館日数》42日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ

《主催》佐賀大学芸術地域デザイン学部設置準備委員会 / 佐賀大学文化教育学部

《共催》佐賀大学美術館

《展示構成》田中嘉生 / 荒木博申 / 柳健司 / 徳安和博 / 小木曾誠 / 石崎誠和 / 井川健 / 田中右紀 / 赤津隆 / 中村隆敏 / 土屋貴哉 / 杉本達應 / 小坂智子 / 吉住磨子 / 石井美恵 / 花田伸一 / 重藤輝行 / ホートン S. A. / 山下宗利 / 山崎功 / 有馬隆文 / 山口夕妃子 / 富田義典 / 西島博樹 24名による作品26点 パネル24点 計50点

《入館者数》3,873名

《広報媒体》チラシ、ポスター、外看板、HP、FB

《配布資料》チラシ、目録

《関連事業》ギャラリートーク

第1回 日時：4月9日（土）15:00～

講師：柳健司氏（教授、ミクストメディア）

第2回 日時：4月23日（土）13:00～

講師：杉本達應氏（准教授、情報デザイン）

第3回 日時：5月3日（火）13:00～

講師：土屋貴哉氏（准教授、コンテンツデザイン）



チラシ



第1回ギャラリートーク



第2回ギャラリートーク



第3回ギャラリートーク



外観



教員を紹介するパネル

久富邦夫〈東京〉—太宰と出会った修業時代

《展覧会概要》

佐賀大学で石本秀雄とともに西洋画を教えた久富邦夫の学生時代から佐賀大学に勤めるまでの作品を中心に、久富邦夫の半生を紹介した展覧会。

本展では、中でも久富が在学中に東京で出会った師・友人、そして家族との関わりを通して画家としての久富に迫る。また、文豪太宰治が描いた久富の肖像画も公開した。

会期中には担当学芸員によるギャラリートークも開催した。

《会期》平成28(2016)年3月21日(月・祝)～7月10日(日)

《開館日数》96日間

《会場》特別展示室

《主催》佐賀大学美術館

《協力》久富家

《展示構成》絵画18点、資料29点 計47点

《入館者数》4,979名

《広報媒体》チラシ、ポスター、外看板、HP、FB

《配布資料》チラシ、目録

《関連事業》担当学芸員によるギャラリートーク

日時：4月9日(土)、5月28日(土)、6月25日(土)

いずれも14:00～



チラシ



第2回ギャラリートーク



第3回ギャラリートーク

出品リスト

No.	作家名	作品名	制作年	素材・形状	寸法 (cm)	所蔵先
1	久富邦夫	萩窪風景	1938 (昭和13)	油彩・カンヴァス	38.5×45.5	久富家
2	久富邦夫	研究所の中	1939 (昭和14)	油彩・カンヴァス	72.7×60.6	久富家
3	久富邦夫	山麓のK先生	1939 (昭和14)	油彩・板	22.0×27.3	久富家
4	久富邦夫	十和田湖	1938 (昭和13)	油彩・板	22.0×27.3	久富家
5	久富邦夫	松島風景	1940 (昭和15)	油彩・板	22.0×27.3	久富家
6	久富邦夫	太海 (ふとみ)	1935 (昭和10)	油彩・板	22.0×27.3	久富家
7	久富邦夫	武蔵野	1938 (昭和13)	油彩・板	22.0×27.3	久富家
8	久富邦夫	都会暮秋	1937 (昭和12)	油彩・板	22.0×27.3	久富家
9	久富邦夫	伊豆松崎	1940 (昭和15)	油彩・板	22.0×27.3	久富家
10	久富邦夫	河口湖富士	1935 (昭和10)	油彩・板	22.0×27.3	久富家
11	久富邦夫	外房	1936 (昭和11)	油彩・板	22.0×27.3	久富家
12	太宰 治	久富君像		油彩・カンヴァス	18.0×14.0	久富家
13	久富邦夫	自画像		油彩・板	33.0×23.6	久富家
14	久富邦夫	モデルとY先生	1949 (昭和24)	油彩・カンヴァス	91.0×72.7	久富家
15	久富邦夫	扇	1940 (昭和15)	油彩・カンヴァス	91.0×72.7	久富家
16	久富邦夫	手紙	1941 (昭和16)	油彩・カンヴァス	91.0×72.7	久富家
17	久富邦夫	兄弟	1954 (昭和29)	油彩・カンヴァス	130.3×97.0	久富家
18	久富邦夫	鏡台のある室内		油彩・カンヴァス	91.0×72.7	久富家

資料

No.	作家名	資料名	制作年	素材・形状	寸法 (cm)	所蔵先
19	久富邦夫	「回想 北島浅一先生」	1986 (昭和61)	原稿用紙		久富家
20	久富邦夫	「北島浅一先生と私」	1986 (昭和61)	佐賀新聞		久富家
21	久富邦夫	絵日記	1936 (昭和11)	日記		久富家
22	久富邦夫	絵日記	1936 (昭和11)	日記		久富家
23	久富邦夫	「遊心録」		新聞記事 (掲載紙不明)		久富家
24	久富邦夫	「太宰治の酔筆」	1974 (昭和49)	夕刊新佐賀		久富家
25	久富邦夫	「太宰治とは酒仲間だった」	1966 (昭和41)	夕刊新佐賀		久富家
26	久富邦夫	アトリエにて		写真		久富家
27		太宰作の書の前にて		写真		久富家
28		小館善四郎と		写真		久富家
29	太宰 治	『新ハムレット』	1941 (昭和16)	書籍		久富家
30	太宰 治	『二十世紀旗手』	1937 (昭和12)	書籍		久富家
31	小館善四郎	久富邦夫宛はがき	1978 (昭和53)	はがき		久富家
32	小館善四郎	久富邦夫宛はがき	1991 (平成3)	はがき		久富家
33	津島美知子	久富邦夫宛はがき	1997 (平成9)	はがき		久富家
34		「新郷土」	1952 (昭和27)	雑誌		久富家
35	山口亮一	久富邦夫宛書簡	年不詳 (6月15日付)	手紙		久富家
36		扇		写真		久富家
37	久富邦夫	スケッチブック		資料		久富家
38	久富邦夫	「筒井茂雄さんのこと」	1960 (昭和35)	原稿用紙		久富家
39	久富邦夫	「思い出」	2003 (平成15)	原稿用紙		久富家
40		納富進個展パンフレット	1944 (昭和19)	資料		久富家
41	納富 進	久富邦夫宛はがき	1951 (昭和26)	はがき		久富家
42	納富 進	久富邦夫宛はがき	1956 (昭和31)	はがき		久富家
43		『浮立亭隨筆』	1970 (昭和45)	書籍		久富家
44		新郷土 (通算400号)	1982 (昭和57)	雑誌		久富家
45		第6回西虹会目録	1954 (昭和29)	目録		久富家
46	久富邦夫	手帳	1949 (昭和24)	手帳		久富家
47		西虹会同人久富邦夫近作展		写真		久富家

佐賀の美術教師たち—地方画壇の成立と美術教育者

《展覧会概要》

明治から戦後にかけて活動した佐賀県ゆかりの美術教育者たちを3章構成で紹介。

有田に始まり、洋画技法と格闘し、中央画壇からの距離や、作家と教育者という2つのアイデンティティの間で苦悩しながら「未来への橋渡し」役を担った各世代の美術教師たちの現存する作品を展示し、教育面から佐賀の美術史を辿った。

会期中は作家の関係者や、異なる立場で美術教育に関わってきた研究者、教育者を招き、トークイベントやギャラリートークを開催した。

《会期》平成28(2016)年5月20日(金)～7月10日(日)

《開館日数》45日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ、小展示室

《主催》佐賀大学美術館

《協力》佐賀県立美術館

《展示構成》絵画35点、日本画17点、彫刻3点、陶磁器4点、その他資料7点 計66点

《入館者数》4,958名

《広報物》チラシ、ポスター、外看板、HP、FB

《配布資料》チラシ、目録

《関連事業》講演会「近代日本の美術教育者—佐賀について」

日時：6月4日(土)13:00～15:30

講師：金子一夫氏(茨城大学特任教授)

会場：佐賀大学教養教育1号館 129番教室

オープニングトーク

「佐賀の美術教師たち」

日時：5月20日(金)10:00～

会場：佐賀大学美術館1階

トークイベント

「美術教育—3つの視点」

日時：6月11日(土)13:00～17:00(途中休憩あり)

出演：野中耕介氏(佐賀県立美術館学芸員)

平江 潔氏(佐賀県立大和特別支援学校教諭)

栗山裕至氏(佐賀大学教育学部教授)

会場：佐賀大学経済学部4号館 4番教室

担当学芸員によるギャラリートーク

日時：5月28日(土)、6月18日(土)、7月9日(土)いずれも13:00～



チラシ



ギャラリートーク

講演会



トークショー

出品リスト

No.	作家名	タイトル	制作年	素材・形状	寸法 (cm)	出品歴	所蔵先
I 章 図画教育のあけぼの							
1		「勉修學會」 有栖川宮熾仁親王殿下御親筆扁額			53×155		佐賀県立有田工業高等学校
2	川崎千虎	淡彩人物図		紙本着色	34×54		有田町歴史民俗資料館
3	納富介次郎	蓬萊図	1916 (大正5)	絹本着色	126.5×32.6		佐賀県立美術館
4	原型：寺内信一 製作：寺内信平	白磁観音像		白磁器 / 陶彫	H65		個人蔵
5	寺内信一	寿星像		磁器焼締め / 陶彫	H13.5		個人蔵
6	寺内信一	蝦蟇仙人		磁器焼締め / 陶彫	H14		個人蔵
7	徳見知敬	古伊万里様式陶磁器図案集より	1890-1920 (明治20-大正10頃)	墨・紙 (一部彩色)	各23.7×30		佐賀県立美術館
8	図案：藤井豊 (紫水) 製作：加藤金和	大正天皇御大典記念 菊花紋章入桐鳳鷲浮彫染付花瓶		磁器 / 壺	46.5×27.5		佐賀県立有田工業高等学校
9	腹巻勝太郎 (丹丘)	秋の女神		紙本着色	130×62		個人蔵
10	腹巻勝太郎 (丹丘)	落花		紙本着色	130×64		個人蔵
11	腹巻勝太郎 (丹丘)	腹巻丹丘の学生による絵日記		墨・紙 (一部彩色) / 冊子			個人蔵
12	井芹一二 (蘇泉)	源氏物語絵		絹本着色	112×35.5		個人蔵
13	鶴 清気 (精屋)	清流		油彩・カンヴァス	62.5×132		佐賀県立美術館
14	鶴 清気 (精屋)	達磨図		紙本墨画	133×63		個人蔵
15		寄書 (似顔) 軸	1913 (大正2)	紙本墨画	130×40		個人蔵
16	森 三美	筑後風景	1910 (明治43) 頃	油彩・板	22.2×31.6		個人蔵
17	森 三美	河岸放牛図		鉛筆・紙	28.5×38.3		個人蔵
18	坂本繁二郎	河岸放牛図		鉛筆・紙	45.0×52.1 (紙寸)		石橋美術館
19		A. F. グレース 『油彩風景画の指南書』	1885ロンドン (第2版)				石橋美術館
20		『英国絵画』	1902ロンドン				石橋美術館
21		森三美教員検定願添付「履歴書」	1900 (明治33)				個人蔵
22	長井智覚 (天璋)	用姫		絹本着色	140×56		恵日寺
23	長井智覚 (天璋)	風凰図屏風		2 曲屏風	91×171		恵日寺
24	中尾爲一	洛外早春	1926 (大正元)	絹本着色	165.5×222 (額寸)	聖徳太子奉賛展 入選	鹿島市蔵
25	中尾爲一	母と子	1928 (昭和3)	絹本着色	124.5×79		個人蔵
26	中尾爲一	婦人像 (香の像)		絹本着色	114.5×86.5		個人蔵
27	中尾爲一	写生画帳					個人蔵
28	中尾爲一	中学校用国文教科書	1928 (昭和3) 富山房				個人蔵
29		中尾爲一履歴書					個人蔵
30	佐々木義政	ベスタロッナとシュタツツの孤児： K. グローブ 作品模写	1951 (昭和26)	油彩・カンヴァス	98×123 (額寸)		鹿島市蔵
II 章 作家として教師として							
31	山口亮一	図画の時間	1914 (大正3)	油彩・カンヴァス	33.3×45.2		佐賀県立美術館
32	山口亮一	鳥と子供	1922 (大正11)	油彩・カンヴァス	161.7×96.7	第4回帝展 入選	佐賀県立美術館
33	大江寅五郎	男の像		油彩・板	33.2×23.8		佐賀県立美術館
34	田中宗一	風景	1946 (昭和21)	水彩・紙	50.2×68.1		個人蔵
35	田中宗一	ひまわり	1948 (昭和23)	水彩・紙	48.1×57.4		佐賀県立美術館
36	田中宗一	水仙	1950 (昭和25)	水彩・紙	28.4×19.2		個人蔵
37	若林景光	ユカリ樹のある庭	1955 (昭和30)	油彩・カンヴァス	38.1×45.6		佐賀大学美術館
38	若林景光	北山浅春	1965 (昭和40)	油彩・カンヴァス	53.0×72.8		佐賀大学美術館
39	川浪養治	マナヅル		紙本着色	108.4×76.4		佐賀県立美術館
40	小栗 潮	収穫の風景		紙本着色	128.6×157.5		佐賀県立美術館
41	平嶋信	鬼丸風景		油彩・カンヴァス	37.9×45.7		佐賀県立小城高等学校黄城会
42	北嶋兵一	龍		紙本墨画	120×42		個人蔵
43	北嶋兵一	海水浴	1909 (明治42)	水彩・色紙	36×57		個人蔵
44	北嶋兵一	風景	1912 (大正元)	水彩・色紙	66.1×80.6 (額寸)		個人蔵
45	北嶋兵一	さくら	1947 (昭和22)	油彩・板	49.9×65.3		個人蔵
46	北嶋兵一	落合風景	1956 (昭和31)	油彩・カンヴァス	45.5×53		個人蔵
47	北嶋兵一	雪景	1926 (大正15)	油彩・カンヴァス	45.5×53		個人蔵
48	石本秀雄	校庭の春	1934 (昭和9)	油彩・カンヴァス	112×145		佐賀県立小城高等学校
49	宮地 亨	精油工場	1950年代初	油彩・カンヴァス	97.4×130		佐賀県立美術館
50	高脚種行	黒い牛	1954 (昭和29)	油彩・カンヴァス	91×116.5		佐賀県立美術館
51	武藤辰平	フランス風景	1931-34 (昭和6-9)	油彩・カンヴァス	116.5×116.3		佐賀県立美術館
52	武藤辰平	春：ミレー作品模写	1931-34 (昭和6-9)	油彩・カンヴァス	86×111		個人蔵
53	武藤辰平	睡蓮：モネ作品模写	1931-34 (昭和6-9)	油彩・カンヴァス	60.6×72.8		個人蔵
54	武藤辰平	カルタ取り：セザンヌ作品模写	1931-34 (昭和6-9)	油彩・カンヴァス	46×55		個人蔵
55	武藤辰平	花：ルドン作品模写	1931-34 (昭和6-9)	油彩・カンヴァス	61×61.1		個人蔵
56	武藤辰平	果物：ボナール作品模写	1931-34 (昭和6-9)	油彩・カンヴァス	55.2×55.3		個人蔵
57	村岡平蔵	夏の果物		油彩・カンヴァス	37.8×45.6		佐賀県立美術館
58	山口孝行	画室		油彩・カンヴァス	162.0×130.3		佐賀県立美術館
III 章 美術教育の志							
59	石本秀雄	画家の家族	1951 (昭和26)	油彩・カンヴァス	194×130	第7回日展 特選・朝倉賞	佐賀県立美術館
60	杉本好守	桌上静物	1954 (昭和29)	油彩・カンヴァス	60.3×91	第20回記念東光会展 入選	唐津市近代図書館
61	古賀忠雄	男の顔		ブロンズ	35×35×75		佐賀大学美術館
62	緒方敏雄	きこえる	1977 (昭和52)	樹脂	35×35×165	第9回日展 特選	佐賀県立美術館
63	井手誠二郎	学芸会	1951 (昭和26)	石膏	24×40×135	第1回佐賀県展 教育委員会賞	作家蔵
64	深川善次	静物	1950 (昭和25)	油彩・カンヴァス	73×91		作家蔵
65	深川善次	洗濯	1955 (昭和30)	油彩・カンヴァス	97×130	第5回佐賀県展 鹿島市長賞	作家蔵
66	深川善次	「この子は一人よ」	1989 (平成元)	色鉛筆・紙	25.6×18.2		作家蔵

佐大の工芸—平成27年度新収蔵品による

《展覧会概要》

平成27年度に新しく収集した作品の中から、佐賀大学の工芸分野で教鞭をとった旧教員の作品を紹介した。

染色教室の初代教員である城秀男と、その後を継いだ小川泰彦の屏風。佐賀大学特別教科教員養成課程の開設にあたり招聘された豊田勝秋の鍍金作品。佐賀で多くの後進を育てた瀧一夫と、教え子で窯芸教室を引き継いだ宮尾正隆の壺など、5作家による6点を展示した。

《会期》平成28(2016)年7月23日(土)～11月20日(日)

《開館日数》101日間

《会場》特別展示室

《主催》佐賀大学美術館

《展示構成》陶器2点、磁器1点、屏風2点、鍍金1点 計6点

《入館者数》4,389名

《広報媒体》チラシ、ポスター、外看板、HP、FB

《配布資料》チラシ、目録



チラシ

出品リスト

No	作家名	作品名	制作年	寸法 (cm)	素材	出品歴	寄贈者
1	城 秀男	豊	1967 (昭和42)	144×162	二曲屏風	第10回日展特選	堀 直子氏
2	小川泰彦	不知火の有明	1978 (昭和53)	170×140	二曲屏風	改組第10回日展	小川泰彦氏
3	瀧 一夫	萌黄釉角壺	1967 (昭和42)	30×24×24	陶器		文化教育学部より管理替
4	瀧 一夫	緑釉壺		30×27×27	陶器		文化教育学部より管理替
5	豊田勝秋	鍍銅瓶 (糸目)	1966 (昭和41)	32.7×24.3	鍍金	第9回日展	文化教育学部より管理替

参考出品

6	宮尾正隆	層	2002 (平成14)	45×32	磁器		
---	------	---	-------------	-------	----	--	--



久富邦夫〈佐賀〉—創造の旅

《展覧会概要》

春に開催した「久富邦夫〈東京〉—太宰と出会った修業時代」の第2弾。応召、終戦を経て佐賀に拠点を移した久富の作品を紹介した。

佐賀の郷土芸能をモデルとしたスケッチや作品、その制作過程が分かるエスキースや映像資料、絶筆となった「しあわせなら手を（2009）」までを公開し、久富が故郷の美術界にどんな影響をもたらしたのかを当時の資料から紐解いた。

《会期》平成28（2016）年11月25日（金）～平成29年3月25日（土）

《開館日数》95日間

《会場》特別展示室

《主催》佐賀大学美術館

《協力》久富家/唐津市近代図書館

《展示構成》絵画15点、陶器3点、資料33点、映像作品3点 計54点

《入館者数》4,191名

《広報媒体》チラシ、ポスター、外看板、HP、FB

《配布資料》チラシ、目録

《関連事業》担当学芸員によるギャラリートーク

日時：平成28年12月18日（日）11:00～

平成29年1月21日（土）14:00～

映像上映

1	STS ニュースレポート 久富邦夫回顧展インタビュー	1985（昭和60）	5分	サガテレビ
2	白鬚神社の稚児田楽 資料映像	2016（平成28）	3分48秒	
3	久富邦夫〈東京〉 展示風景	2016（平成28）	5分15秒	



チラシ



第1回ギャラリートーク



第2回ギャラリートーク

出品リスト

No.	作品名	制作年	材質・形状	寸法 (cm)	出品歴	所蔵先
1	絵のある部屋	1958 (昭和33)	油彩・キャンバス	145.5×97	第1回新日展	久富家
2	松島風景	1940 (昭和15)	油彩・板	22×27.3	郷土作家油絵展	久富家
3	絵皿		磁器	口径24.4		久富家
4	絵皿		磁器	口径30		久富家
5	昭和45年成人式記念品	1970 (昭和45)	磁器	口径23.5		久富家
6	祭の日	1974 (昭和49)	油彩・カンヴァス	162×130.3	第6回改組日展	久富家
7	白髪神社田楽		水彩・紙	27.2×24.2		久富家
8	文楽		水彩・紙	27.2×24.2		久富家
9	面浮立		水彩・紙	27.2×24.2		久富家
10	黒牟田のぼり窯		水彩・紙	27.2×24.2		久富家
11	赤い鉄橋	1960 (昭和35)	油彩・板	24.3×33.4		久富家
12	根子岳	1960 (昭和35)	油彩・板	24.3×35		久富家
13	ほりばた (公会堂と文化館)	1951 (昭和25)	油彩・板	21.8×27		久富家
14	春の山	2007 (平成19)	油彩・カンヴァス	130.3×162	第69回一水会展	佐賀大学医学部附属病院
15	レストラン	1995 (平成7)	油彩・カンヴァス	130.3×162		久富家
16	しあわせなら手を	2009 (平成11)	油彩・カンヴァス	116.6×91.6	第71回一水会展 (絶筆)	久富家
17	無題 (人形)		油彩・カンヴァス	18×14		久富家
18	人形と尾崎人形		水彩・紙	24.2×27.2		久富家

資料

No.	資料名	制作年	材質・形状	寸法 (cm)	制作・発行元	所蔵先
19	郷土作家油絵展目録	1946 (昭和21)	目録		第80回佐賀美術協会展 記念誌より	久富家
20	賑わう“郷土作家油絵展”	1946 (昭和21) 12.3	新聞記事			
21	郷土作家油絵展	1946 (昭和21) 11.30	新聞記事			
22	第1回西虹会ポスター	1949 (昭和24)				久富家、唐津市近代図書館
23	第7回西虹会ポスター	1955 (昭和30)				久富家、唐津市近代図書館
24	西虹会画展ひらく	1950 (昭和25) 4.26	新聞記事			
25	西虹会を結成	1949 (昭和24) 5.6	新聞記事			
26	スクラップブック		資料	30.3×19.9		久富家
27	第6回西虹会目録	1954 (昭和29)	資料	18.3×46.3		久富家
28	教師時代の久富邦夫		写真			久富家
29	第13回美術科総合展目録	1970 (昭和45)	目録	59×41.8		久富家
30	あの頃	1987 (昭和62)	原稿用紙	25.1×35.7 (4枚)		久富家
31	佐賀大学教育学部特設美術科要覧	1956 (昭和31)	資料	27.1×51.5		久富家
32	新郷土9月号「陶画創造の—こま」	1952 (昭和32)	雑誌		佐賀県文化館	
33	新郷土12月号	1952 (昭和32)	雑誌	25.7×18.7	佐賀県文化館	久富家
34	白髪神社田楽の様子	2016 (平成28)	写真			
35	松枝神社奉納浮立の様子	2016 (平成28)	写真			
36	新郷土3月号	1971 (昭和46)	雑誌	25.7×18.3	新郷土刊行協会	久富家
37	新郷土9月号表紙のエスキース	1954 (昭和29)	水彩・紙	27×38.1		久富家
38	新郷土9月号	1954 (昭和29)	雑誌		佐賀県文化館	久富家
39	甲柳原面浮立風俗 (小城市)		写真			久富家
40	岩栗神社にて	1955 (昭和30)	写真			久富家
41	スケッチブック		水彩・紙	26.2×33.7		久富家
42	「春の山」のエスキース		水彩・紙	23.6×32.9		久富家
43	「レストラン」のエスキース		水彩・紙	25×33.3		久富家
44	「レストラン」のエスキース		水彩・紙	25.8×32.8		久富家
45	エスキースに使用した雑誌の切り抜き		紙			久富家
46	「レストラン」資料写真		写真	8.2×11.9		久富家
47	尾崎人形		陶器	12.2×6.5×9.9		久富家
48	久富邦夫の絵筆、ペインティングナイフ、 万年筆					久富家
49	新郷土7月号	1987 (昭和62)	雑誌	25.7×18.3	新郷土刊行協会	久富家
50	制作の様子		写真	8.2×11.7		久富家
51	アトリエにて		写真			久富家

2. 展示記録 (企画申請)

幕末維新期の小城—書聖・中林梧竹の生きた時代

佐賀大学と旧小城町（現小城市）の交流協定に基づき毎年行われている、小城地域の歴史に関する企画展のプレイバック企画。本展では、佐賀大学附属図書館が所蔵する「小城鍋島文庫」の史料から、幕末の小城藩の様子や明治の書聖・中林梧竹に関連する古文書、古記録、パネル等を、佐賀大学美術館と菊楠シュライバー館の2か所で展示した。



《会期》平成28（2016）年7月15日（金）～8月10日（水）

《開館日数》23日間

《会場》（第1会場）佐賀大学美術館 小展示室
（第2会場）佐賀大学菊楠シュライバー館

《主催》佐賀大学地域学歴史文化研究センター



芸術表現基礎・地域デザイン基礎 成果発表展

佐賀大学芸術地域デザイン学部の1年生が、前期授業内で制作した成果を発表した。

館内だけでなく、美術館の周囲にも竹でつくられたオブジェを展示したほか、オープンキャンパスでは学生によるギャラリートークを開催した。



《会期》平成28（2016）年7月23日（土）～8月10日（水）

《開館日数》16日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ、中庭

《主催》佐賀大学芸術地域デザイン学部



楢崎重視と東光会佐賀支部展◇画業60年米寿記念◇

佐賀師範学校（本科）を卒業し日展、東光会で活躍を続ける楢崎重視の作品を中心に、1951年石本秀雄氏によって結成された東光会佐賀支部緑光会を紹介する展覧会。洋画93点が展示され、会期中には楢崎氏によるギャラリートークや緑光会の夏季研究会も一般公開された。

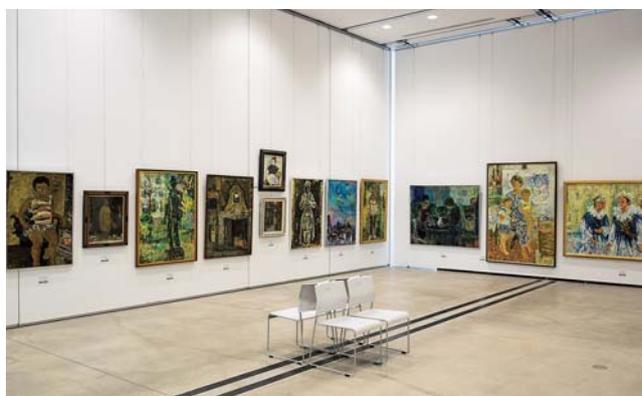
《会期》平成28（2016）年8月19日（金）～28日（日）

《開館日数》9日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ

《主催》東光会佐賀支部緑光会

《共催》佐賀新聞社



佐賀大学教育学部附属特別支援学校 第1回 児童生徒作品展

佐賀大学教育学部附属特別支援学校の活動を紹介します。小学部から高等部までの児童・生徒58名が日頃の授業で制作した水彩画や版画、立体作品、作業作品など約110点のほか、教職員6名による作品も数点展示した。

《会期》平成28（2016）年9月2日（金）～11日（日）

《開館日数》9日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2

《主催》佐賀大学教育学部附属特別支援学校



S-YOU-GA 展

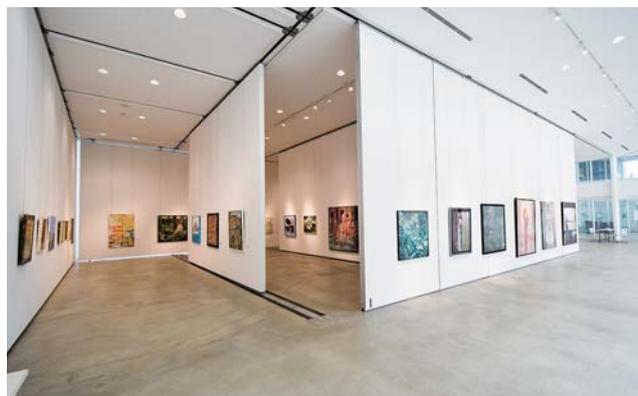
佐賀大学芸術地域デザイン学部西洋画専攻と崇城大学芸術学部洋画コース（熊本県）の合同企画展。両大学の学生と教員ら約50名による53点の絵画が美術館で展示されたほか、関連して佐賀市内の「ギャラリー憩ひ」でも小作品が展示された。

《会期》平成28（2016）年9月17日（土）～22日（木・祝）

《開館日数》5日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ

《主催》佐賀大学芸術地域デザイン学部（西洋画専攻）／崇城大学芸術学部（洋画コース）



ダイアログ・イン・ザ・ダーク 佐賀2016

視覚障がい者の案内のもと、暗闇の中で視覚を用いずに行うゲームなどを通して、五感の豊かさや人の温かさ、コミュニケーションの大切さ等を感じる体験型イベント。

参加は予約制で、平日は佐賀市内の小学生360名がクラス単位で、土日は一般からの応募者が参加した。

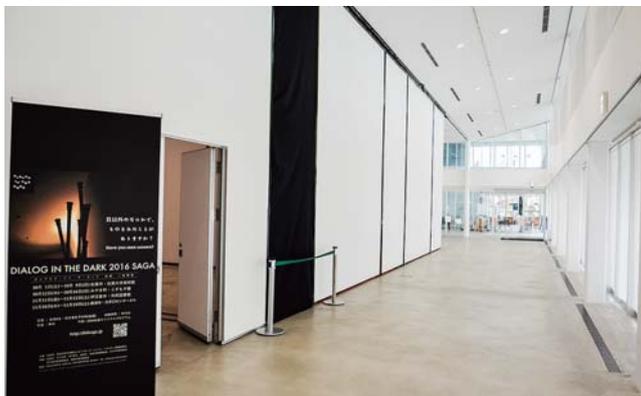
《会期》平成28（2016）年9月30日（金）～10月9日（日）

《開館日数》8日間

※台風18号で参加校が休校となったため1日休み

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ

《主催》佐賀県／特定非営利活動法人ダイアログ・ジャパン・ソサエティ（協働型委託）



国際大学折紙連盟 (ICOA) 作品展

国際大学折紙連盟が、大学の折り紙サークルの恒常的な継続とグローバルな発展を目的に開催している展覧会。

国内外の実力ある学生・作家の折り紙作品約280点が一堂に会し、今までの折り紙のイメージを払拭する最先端の折り紙作品が展示された。

《会期》平成28 (2016) 年10月14日 (金) ~30日 (日)

《開館日数》15日間 《会場》スタジオ

《主催》折紙探偵団九州友の会

《共催》国際大学折紙連盟 (ICOA)

《協賛》おりがみはらす / ソシム(株) / 日本ヴォーグ社 / (株)主婦と生活社 / ナツメ出版企画(株) / (株)日本評論社 / (株)西東社 / (株)日貿出版社



第7回 璞友会展

佐賀県内で書や水墨画を学んでいる璞友会による展覧会。

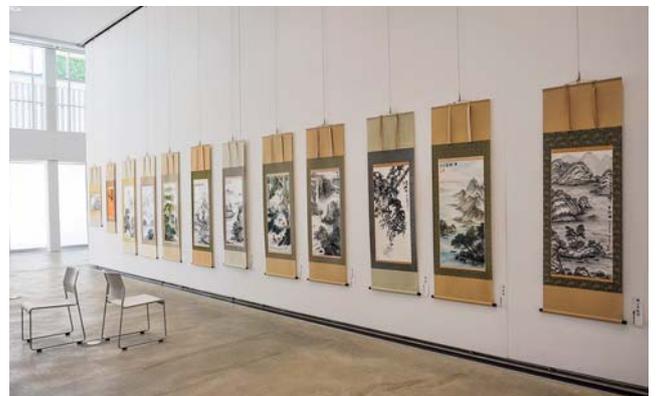
指導者とメンバー27名による、墨跡鮮やかな約50点の山水画や書が展示された。

《会期》平成28 (2016) 年10月18日 (火) ~23日 (日)

《開館日数》6日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2

《主催》璞友会



平成28年度 JA 共済 小・中学生第52回書道・第42回交通安全ポスターコンクール

JA 共済が文化支援事業として毎年実施している全国規模のコンクールの入賞作品展。

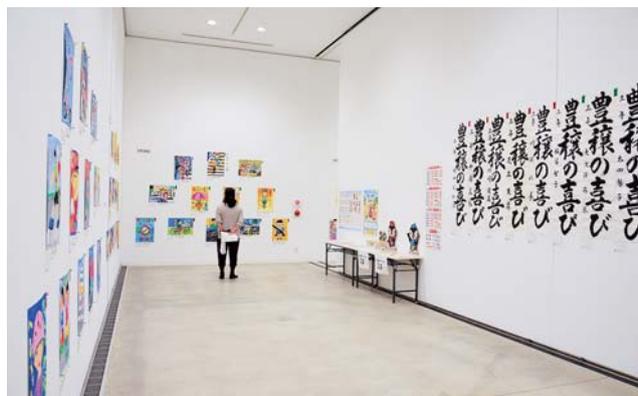
当館では応募された書作品（半紙22803点、条幅2691点）およびポスター（5128点）の中から、入選・入賞を果たした324点を展示した。

《会期》平成28（2016）年10月27日（木）～11月3日（木・祝）

《開館日数》7日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2

《主催》農業協同組合 / 全国共済農業協同組合連合会佐賀県本部



第5回 佐賀大学コンテンツデザインコンテスト特別企画「日本アニメーションの過去・現在・未来」

戦前から日本のアニメーション制作に関わり、「人形アニメーションの父」と呼ばれた佐賀出身の持永只仁氏を顕彰する展覧会。持永氏が手掛けたアニメーションを上映し、撮影に使われた60体以上の人形を展示した。さらにトークショーや国内の27のアニメーション学科が参加する学生アニメの祭典「ICAF2016」の巡回上映も行った。

《会期》平成28（2016）年11月8日（火）～19日（土）

《開館日数》11日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ、小展示室

《主催》佐賀大学コンテンツデザインコンテスト実行委員会

《共催》佐賀大学地域環境コンテンツデザイン研究所 / デザイン思考研究所共創ラボ / C-revo in Saga



第58回 総合展

例年、本学の文化教育学部美術・工芸課程3年生が中心となって運営する、伝統ある学生による総合美術展。大学美術館での開催は今回が4回目で、芸術地域デザイン学部創設後としては初となる。

今年も学生や院生有志らにより、専攻の枠を越えた様々な作品が展示された。

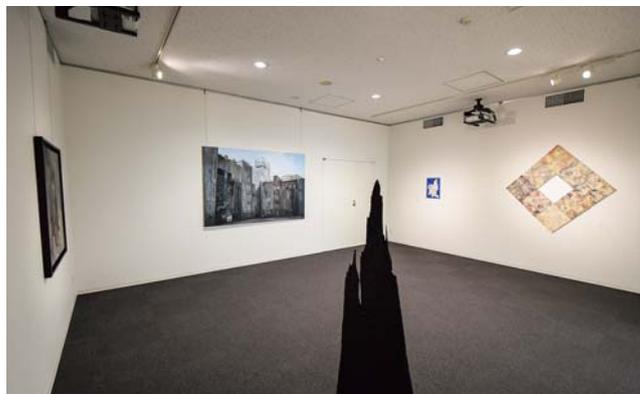


《会期》平成28(2016)年11月24日(木)～12月4日(日)

《開館日数》10日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ、小展示室

《主催》佐賀大学文化教育学部美術・工芸課程/芸術地域デザイン学部



第57回 佐賀県学童美術展

佐賀県内の就園児および小・中学生を対象にした作品展で、今年から佐賀大学美術館での開催となった。子供たちによる感性と創造性に溢れる絵画、線描、デザインの県特選作品645点が展示され、会期中には表彰式と、本学教育学部の栗山裕至教授による造形ワークショップが行われた。



《会期》平成28(2016)年12月13日(火)～12月18日(日)

《開館日数》6日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ

《主催》佐賀県造形教育研究会



Sブリュット公募展 もうひとつのものさし展

社会福祉法人はるによる公募展。佐賀県在住または佐賀県でアート活動を行う障がい者から作品を募り、入選・入賞した20名の作品を展示した。

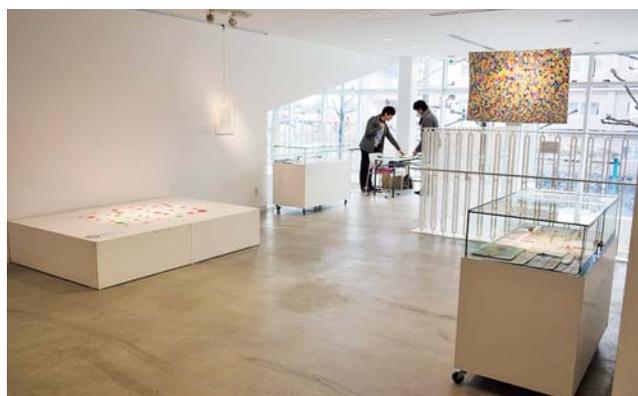
アクリル絵具、色鉛筆、ペン画など、自由な素材とテーマで制作された21点の作品が展示された。

《会期》平成29(2017)年1月7日(土)～1月15日(日)

《開館日数》8日間

《会場》小展示室

《主催》社会福祉法人はる



第32回 佐賀県高等学校美術教師作品展

第6回 佐賀県高等学校美術科授業生徒作品展「これが高校美術だ!」

佐賀県内の高校で美術を教える教師たちによる展覧会。

併せて高校美術における成果を広く一般に発表し、高校で美術を学ぶ意義を伝えることを目的として第6回目となる授業生徒作品展も同会場内で開催された。

《会期》平成29(2017)年1月18日(水)～1月22日(日)

《開館日数》5日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ

《主催》佐賀県高等学校教育研究会 芸術部会 美術部会



第41回 佐賀県高等学校書道教師書作展

佐賀県内の高校で書道を担当する教師が授業研究会の他に、年に一度の作品発表の場として開催している展覧会。日頃の研鑽の成果として37名が54点の書や掛軸を展示した。

また、高校書道部、選択授業の生徒の学習成果の一環として佐賀県高等学校生徒臨書展の優秀作品も展示された。

《会期》平成29(2017)年1月25日(水)～1月29日(日)

《開館日数》5日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ

《主催》佐賀県高等学校教育研究会書道部会

《共催》佐賀県高等学校文化連盟書道専門部



第57回 生徒立体作品展

第48回 佐賀市教職員美術展

佐賀市内の小・中学校の児童生徒作品と、図工・美術を指導する教員及び退任者による作品展。

当館では初の開催となった本展では、児童生徒により288点、教職員12名により13点の作品が展示された。

《会期》平成29(2017)年2月3日(金)～2月10日(金)

《開館日数》7日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2

《主催》佐賀市教科等研究会図工・美術部会



第61回 佐賀大学文化教育学部美術・工芸課程 卒業制作展

第23回 佐賀大学大学院教育学研究科美術 修了制作展

佐賀大学で制作を続けてきた39名の卒業生・修了生（学生36名、院生3名）による、学生生活の集大成となる作品展。

西洋画、日本画、デザイン、彫塑、染色工芸、窯芸、木工・漆工、美術史・美術理論の8専攻から作品40点、論文8点が出品された。

《会期》平成29（2017）年2月17日（金）～2月26日（日）

《開館日数》9日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ、小展示室

《主催》佐賀大学文化教育学部美術・工芸課程 / 佐賀大学大学院教育学研究科



佐賀大学デジタル表現技術者養成プログラム第7期生修了作品展「電腦芸術展」

佐賀大学で「デジタル表現技術者養成プログラム」を受講した学生による修了制作展。

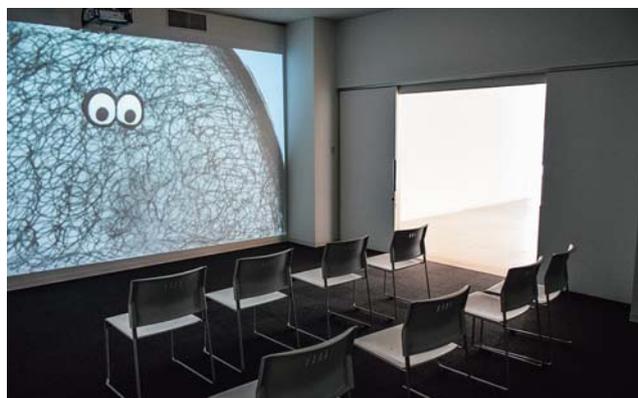
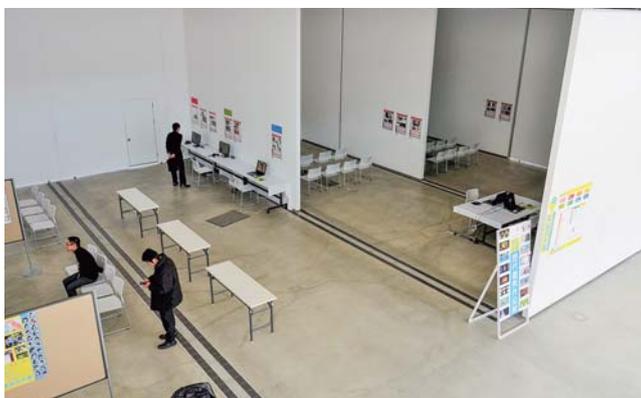
7回目となる今回も、多彩な動画や、来館者が操作できる双方向型作品等19点が集まり、学生達の感性と、2年間の学びの成果が伝わる展示となった。

《会期》平成29（2017）年3月2日（木）～3月5日（日）

《開館日数》4日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、小展示室

《主催》佐賀大学クリエイティブ・ラーニングセンター



佐賀大学大学院都市工学専攻・理工学部都市工学科 修士制作・卒業制作展

佐賀大学理工学部都市工学科で学んだ学部4年生と大学院2年生の集大成である卒業制作・修士制作展。社会に潜む問題を提起し、新たな建築を提案しようとするもの。

6回目となる今回は建築模型やプレゼンボードなど11作品を展示した。

《会期》平成29(2017)年3月4日(土)～3月12日(日)

《開館日数》8日間

《会場》スタジオ

《主催》佐賀大学大学院工学研究科都市工学専攻 / 佐賀大学理工学部都市工学科



田中嘉生教授退任記念展

佐賀大学で23年にわたり染色工芸を教えた田中嘉生教授の退任を記念した展覧会。当館で初の現役教授の退任記念展である。

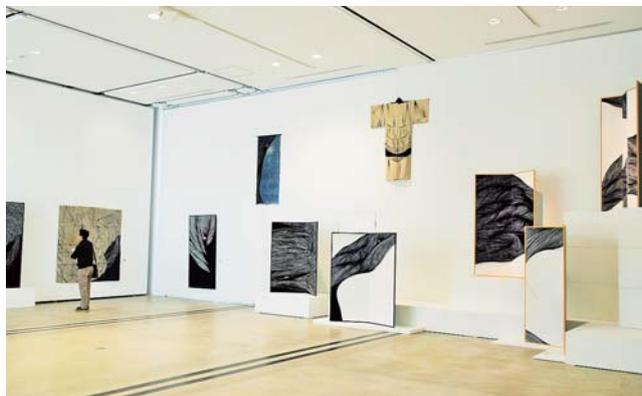
田中教授の蠟染め、糊染めによる代表作46点を公開し、これまでの軌跡を辿った。更に教え子たちの歴代の卒業制作作品などをスライドで紹介した。

《会期》平成29(2017)年3月15日(水)～25日(土)

《開館日数》10日間

《会場》ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ

《主催》佐賀大学文化教育学部美術・工芸課程 / 田中嘉生教授退任記念展実行委員会



3. 実習・研修

概要

平成28年4月の芸術地域デザイン学部開設に伴い、地域デザインコースが設けられ、大学美術館における博物館実習生の受け入れも変化した。平成28年度は学芸員資格取得希望者22名を受け入れ、①資料整理、②監視、③資料取扱の3種類の実習を館内で行い、①②について美術館学芸員が非常勤講師として担当した。

また、3月には初めて中学生の職場体験を受け入れた。

博物館実習① 資料整理実習

《内容》美術館が調査中の個人所蔵の写真について、調書を作成する実習。

実習生は事前に服装や道具類を準備し、当日はグループ内で役割分担をして、資料の採寸や状態の記録を行った。

(実習生1人あたり90分×2回)

《期間》平成28(2016)年10月19日(水)～11月11日(金)までの水曜および金曜 14:40～16:10

※説明会10月12日(水) 14:40～

《参加者》22名



説明会



博物館実習② 監視実習

《内容》館主催事業を教材に、監視および来館者対応の実習を行った。

「久富邦夫〈佐賀〉一創造の旅」(平成28年11月25日(金)～平成29年3月25日(土))の会期中、展示室内の作品、来館者、環境の保全を意識するとともに、来館者対応を行い、気付いたことをレポートにまとめた。

(実習生1人あたり60分×3回)

《期間》平成28(2016)年11月25日(金)～平成29(2017)年1月12日(木)

※説明会11月16日(水) 14:40～

《参加者》22名



説明会

博物館実習③ 資料取扱実習

《内容》美術館が調査中の個人所蔵の書籍などの資料を用いて、芸術地域デザイン学部・石井准教授の指導のもと、基本的な資料の取り扱い方法を学んだ。

帽子、マスク、白手袋を着用し、3人一組のグループで役割分担をし、資料の消毒、採寸、記録を行った。

《期間》平成28(2016)年12月17日(土)14:40~16:10

《参加者》22名



中学生職場体験

《内容》龍谷中学校2年生の職場体験を受け入れた。

「美術館を知ろう」「美術館の環境を整えよう」の2つのテーマに基づき、開館・閉館に関わる作業や広報物の管理等、美術館の業務に携わった。

《期間》平成29(2017)年3月8日(水)9:30~16:00

《参加者》1名



4. 刊行・掲載・見学

〔刊行物〕

図録「佐賀の美術教師たち—地方画壇の成立と美術教育者」

《概要》テキスト：近代日本における佐賀県の中等学校図画教育

金子一夫（茨城大学特任教授）

展示概要 / カタログ / 年表 / 参照文献 / 出品リスト

《仕様》B5版64ページ 4色刷

《発行部数》1000部

《発行日》平成28年5月20日



「佐賀大学美術館 平成27年度年報／紀要」

《概要》年報：館概要 / 沿革 / 組織図 / 平成27年度の活動

紀要：「花毛氈」、「鍋島緞通」とよばれる木綿の敷物について

—歴史解明のための段階的調査記録—

宮原（上田）香苗（元 佐賀県立博物館・美術館 / 佐賀大学美術館 学芸員）

《仕様》AB版54ページ 4色刷

《発行部数》400部

《発行日》平成29年3月24日



〔掲載紙・テレビ・ラジオ〕 ※平成28年度は総数で新聞等135件、TV・ラジオ26件が掲載・放送された。
 ※本頁は館主催事業についての報道のみ抜粋。

- ・ 展覧会情報「久富邦夫〈東京〉—太宰と出会った修業時代」
 (2月26日、3月21日・27日・29日、4月9日・20日・29日、6月5日・9日・21日・28日 佐賀新聞/6月2日・16日、7月7日 朝日新聞/6月3日・10日、7月8日 読売新聞)
- ・ 展覧会情報「芸術地域デザイン学部開設記念展～芸術で地域を拓く、芸術で世界を拓く」
 (3月29日、4月9日・19日・26日 佐賀新聞)
- ・ 太宰治の油絵初公開(4月3日 佐賀新聞)
- ・ ニュース「久富邦夫展」(4月10日 NHK)
- ・ サンデーアート「地域、世界とつながる佐賀大学美術館」
 (4月3日 長崎新聞)
- ・ 新人3教員 多様な世界観(4月12日 佐賀新聞)
- ・ 軽やかさと落ち着いた色彩 青年から壮年期の作品47点
 (4月15日 佐賀新聞)
- ・ 太宰の油絵初公開 友人の画家がモデル(4月28日 東奥日報)
- ・ 展覧会情報「佐賀の美術教師たち—地方画壇の成立と美術教育者」
 (4月29日、5月9日・20日、6月5日・19日・20日・28日 佐賀新聞/7月7日 朝日新聞)
- ・ 有明抄「虚栄にはじまり喝采に終わる」(5月26日 佐賀新聞)
- ・ ニュース「佐賀の美術教師たち」(5月26日 サガテレビ)
- ・ 大学ミュージアム 創意工夫(5月30日 東京朝日夕刊)
- ・ 地方美術支えた教育力、作家力(5月31日 佐賀新聞)
- ・ ニュース「美術教師の作品展」(6月4日 NHK)
- ・ ニュース「久富邦夫氏 展示会」(6月8日 サガテレビ)
- ・ 太宰治の油絵初公開(7月7日 西日本新聞)
- ・ 展覧会情報「佐大の工芸—平成27年度新収蔵品を中心に」
 (7月29日、8月6日・30日・31日、9月30日 佐賀新聞/9月8日・15日・22日・29日、10月6日 朝日新聞)
- ・ 佐賀大元教員の工芸品展(9月1日 夕刊読売新聞福岡版)
- ・ ニュース「佐賀大学工芸分野の教員作品展」(9月23日 NHK)
- ・ 展覧会情報「久富邦夫〈佐賀〉—創造の旅」
 (10月28日、11月8日・25日・29日、12月9日・27日、1月16日・31日 佐賀新聞/11月24日、12月8日、2月2日、3月16日・22日 朝日新聞/3月6日 西日本新聞夕刊)
- ・ 見る者の記憶引き出す 池田学展(3月3日 佐賀新聞)
- ・ まちかどカレンダー(3月9日 佐賀新聞)
- ・ 家族や祭り 日常の美を表現(3月24日 西日本新聞)

〔掲載誌〕

誌名	発行	発行日
ざっしにあ2016年初夏号 Vol. 15 「久富邦夫〈東京〉—太宰と出会った修業時代」	榊副島印刷	平成28年4月27日
MOTEMOITE さが2016年5月号 「芸術で地域を拓く、芸術で世界を拓く」	佐賀新聞文化センター	平成28年5月1日
ひかり野 佐賀大学附属図書館報 No. 40 「市場直次郎コレクションより花鳥風月に遊ぶ～近世の絵師と歌人～」 (執筆：藤森梨衣)	佐賀大学附属図書館	平成28年8月
MOTEMOITE さが2016年11月号 「第58回総合展」	佐賀新聞文化センター	平成28年11月1日
WASABI2016年11月号 「第58回総合展」	榊スイッチわさび編集部	平成28年11月
第四回佐賀市民芸術祭パンフレット 「第58回総合展」	佐賀市	平成28年10月
WASABI2017年2月号 「佐賀大学美術・工芸課程卒業修了制作展」	榊スイッチわさび編集部	平成29年2月

〔見学団体一覧〕 ※事前連絡および申告にて把握できた団体名称および人数。
※参加者数に引率者を含む。

見学日	団体名	人数
4月12日	佐賀大学「アートマネジメント」受講者	29
4月20日	佐賀大学「芸術創造Ⅱ」受講者	17
4月27日	(学)旭学園 佐賀女子短期大学	31
5月24日	佐賀大学「アートマネジメント」受講者	110
5月28日	九州産業大学「美術文化ゼミナール」受講者	32
6月1日	佐賀大学 新採用職員研修	14
6月7日	開成ボランティアひまわり	12
6月16日	福岡県立糸島高等学校 2年生	85
6月18日	(学)佐賀龍谷学園 龍谷高等学校	58
6月23日	福岡県立筑紫中央高等学校 PTA	52
6月23日	福岡県立朝倉高等学校 PTA	65
6月24日	長崎県立佐世保東翔高等学校	126
6月29日	久留米市立南筑高等学校 PTA	32
6月29日	佐賀大学 名誉教授懇親会	70
6月30日	福岡県立福岡工業高等学校 PTA	45
6月30日	福岡県立糸島高等学校 PTA	120
7月1日	山口県立下関南高等学校 PTA	23
7月7日	熊本県立南関高等学校	30
7月8日	山口県立下関南高等学校	81
7月12日	福岡県立山門高等学校	29
7月14日	(学)川島学園 福岡舞鶴高等学校	106
7月28日	長崎県立長崎北高等学校	75
8月19日	鹿児島県立曾於高等学校	21
8月23日	東光会鹿児島支部 鹿光会	12
8月26日	佐賀県立佐賀西高等学校	12
9月2日	保育観察実習	10
9月9日	いとしま市民大学	22
9月17日	佐賀市立城東中学校	19
9月21日	(学)旭学園 佐賀女子短期大学付属 佐賀女子高等学校	42
9月23日	(学)旭学園 佐賀女子短期大学付属 佐賀女子高等学校	8
9月30日	佐賀大学教育学部附属小学校	107
10月4日	佐賀市立赤松小学校	104
10月6日	佐賀市立日新小学校	95
10月7日	佐賀市立西与賀小学校	47
10月15日	福岡アジア美術館ボランティアグループ	25

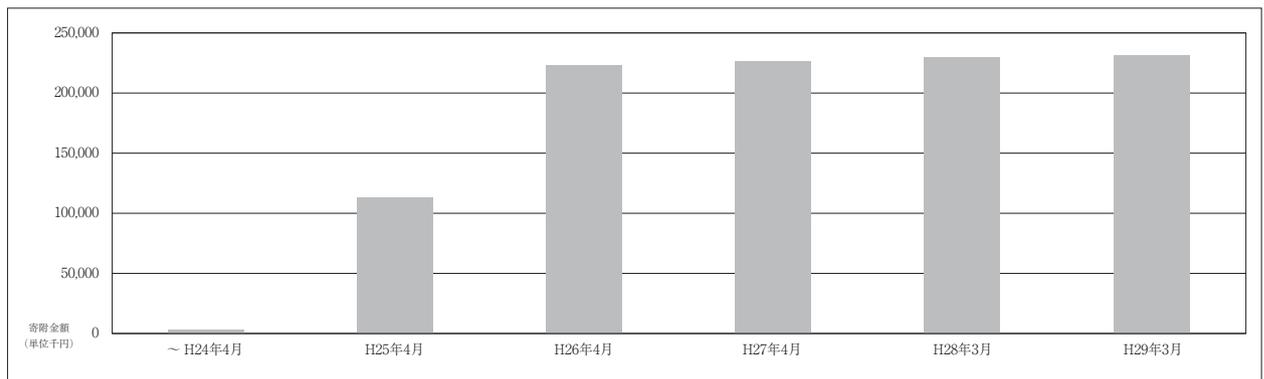
見学日	団体名	人数
10月20日	佐賀大学教育学部附属小学校	18
10月21日	佐賀県立三養基高等学校 PTA	34
10月25日	福岡県立新宮高等学校	43
10月26日	佐賀大学 教育学部 留学生	31
10月26日	佐賀県立佐賀商業高等学校	68
11月17日	佐賀県立香楠中学校	126
11月24日	福岡県立宗像高等学校 PTA	34
11月24日	佐賀大学 芸術地域デザイン学部	27
11月25日	佐賀大学教育学部附属中学校 美術部	20
11月26日	ホームカミングデー	50
11月26日	九州藝術学会	55
11月29日	(学)佐賀美容美容専門学校 アイ・ビューティーカレッジ	20
11月29日	佐賀大学 経済学部「入門ゼミ」受講者	18
12月1日	佐賀大学「地域デザイン基礎(マネジメント)」 受講者	19
12月1日	(学)旭学園 佐賀女子短期大学付属 ふたばこども園	22
12月1日	佐賀市立城東中学校美術部	18
12月10日	佐賀造形教育学習会	20
12月16日	佐賀大学教育学部附属小学校 3年生	40
12月17日	江北町立江北中学校 美術部	11
1月7日	(福)はる	15
1月9日	障害福祉サービス事業所 かがやきの丘	48
1月14日	(福)はる	14
1月20日	保健体育(入学前スクーリング)	10
1月25日	佐賀県立致遠館高等学校	24
1月26日	(学)佐賀清和学園 佐賀清和高等学校	27
1月27日	佐賀県立佐賀西高等学校	34
1月27日	(学)佐賀清和学園 佐賀清和高等学校 1年生	28
1月27日	佐賀県立佐賀西高等学校	35
1月27日	(学)佐賀清和学園 佐賀清和高等学校 1年生	38
1月29日	佐賀県立鹿島高等学校	11
2月18日	佐賀大学教育学部附属中学校 美術部	16
2月20日	白石町立六角小学校	28

平成28年4月12日～平成29年2月20日

5. 寄附

[美術館設置募金の経緯]

- 平成23年 6月 美術館設置募金 WG 設置
- 平成24年 4月 美術館設置事業募金開始
- 平成25年 6月 寄附者芳名帳を公開
- 平成25年 6月 美術館規則の制定に伴い、美術館設置募金 WG を解散
- 平成25年 9月 美術館に高額寄附者銘板を設置
- 平成25年10月 美術館開館後も美術館設置事業募金を継続
- 平成29年 3月 募金総額231, 218, 663円（平成29年 3月31日現在）



6. 職員の館外調査研究・研修等

鬼塚美津子

日 時：平成28年12月12日（月）～12月15日（木）

場 所：国立近代美術館工芸館

目 的：平成28年度独立行政法人国立美術館キュレーター研修

佐々木奈美子

日 時：平成29年 3月 3日（金）

掲 載：佐賀新聞

目 的：寄稿「見る者の記憶引き出す池田学展」

佐々木奈美子

日 時：平成29年 3月10日（金）18時30分～

場 所：佐賀県立美術館

目 的：「池田学展 The Pen」ギャラリートーク

7. 新収蔵作品

収蔵年	作家名	作家名_E	作品名	作品名_E
2016	久富邦夫	HISATOMI, Kunio	山麓のK先生	Mr. K at the foot of the mountain
2016	久富邦夫	HISATOMI, Kunio	扇	A fan
2016	久富邦夫	HISATOMI, Kunio	松島風景	Landscape of Matsushima
2016	久富邦夫	HISATOMI, Kunio	手紙	Letter
2016	久富邦夫	HISATOMI, Kunio	モデルとY先生	Model and Mr.Y
2016	久富邦夫	HISATOMI, Kunio	ほりばた(公会堂と文化館)	Beside the moat (Public hall and Culture hall)
2016	久富邦夫	HISATOMI, Kunio	絵のある部屋	Room with picture
2016	久富邦夫	HISATOMI, Kunio	祭の日	Festival day
2016	太宰 治	DAZAI, Osamu	久富君像	Portrait of Mr. Hisatomi
			久富家関連資料 一式	Related documents of Hisatomi family
			久富家関連書籍 一式	Related books of Hisatomi family
2016	緒方敏雄	OGATA, Toshio	夏折々	Every summer
2016	緒方敏雄	OGATA, Toshio	夏・一章	Summer・Chapter 1
2016	緒方敏雄	OGATA, Toshio	女性立像	Statue Woman
2016	榑崎重視	NARASAKI, Shigemi	五部浄像	Guardian of Buddhism
			榑崎重視関連資料 一式	Related documents of Shigemi Narasaki



久富邦夫〈扇〉



太宰治〈久富君像〉

分類	制作年(和暦)	制作年(西暦)	寸法(H×W×D)	素材	出品歴	寄贈者
西洋画	昭和14	1939	22×27.3	油彩・キャンバスボード		久富家
西洋画	昭和15	1940	116.6×72.7	油彩・カンヴァス		久富家
西洋画	昭和15	1940	22×27.3	油彩・板	郷土作家油絵展	久富家
西洋画	昭和16	1941	116.6×72.7	油彩・カンヴァス		久富家
西洋画	昭和24	1949	91×72.7	油彩・カンヴァス		久富家
西洋画	昭和26	1951	27.8×27	油彩・板		久富家
西洋画	昭和33	1958	145.5×97	油彩・カンヴァス	第1回新日展	久富家
西洋画	昭和49	1974	162×130.3	油彩・カンヴァス	第6回改組日展	久富家
西洋画			18×14	油彩・キャンバスボード		久富家
資料						久富家
書籍						久富家
彫刻	昭和59	1984	173×58.3×41.4	FRP	改組第16回日展	山田英智氏
彫刻	昭和60	1985	173.5×53×42.5	FRP	改組第17回日展	山田英智氏
彫刻			132.6×45.3×26.9	FRP		山田英智氏
西洋画	昭和58	1983	53×45.5	油彩・カンヴァス		榑崎重視氏
資料						榑崎重視氏



緒方敏雄《夏折々》



榑崎重視《五部浄像》

8. 入館者一覧表

※数値に重複あり

展覧会	入場者数	会期	日数	主催	展示会場
芸術地域デザイン学部展 芸術で地域を拓く、芸術で世界を拓く	3,873	3月21日-5月8日	42	芸術地域デザイン学部設置準備委員会/佐賀大学文化教育学部/佐賀大学美術館	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ
久富邦夫〈東京〉—太宰と出会った修業時代	4,979	3月21日-7月10日	96	佐賀大学美術館	特別展示室 ※観覧者実数
佐賀の美術教師たち地方画壇の成立と美術教育者	4,958	5月20日-7月10日	45	佐賀大学美術館	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ、小展示室
幕末維新期の小城 —書聖・中林梧竹の生きた時代	4,467	7月15日-8月10日	23	佐賀大学地域学歴史文化研究センター	小展示室
芸術表現基礎・地域デザイン基礎成果発表展	4,120	7月23日-8月10日	16	佐賀大学芸術地域デザイン学部	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ
佐大の工芸—平成27年度新収蔵品による	4,389	7月23日-11月20日	101	佐賀大学美術館	特別展示室 ※観覧者実数
崎崎重視と東光会佐賀支部展 ◇画業60年米寿記念◇	1,870	8月19日-8月28日	9	東光会佐賀支部緑光会/佐賀新聞社	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ
佐賀大学教育学部附属特別支援学校 第1回 児童生徒作品展	732	9月2日-9月11日	9	佐賀大学教育学部附属特別支援学校	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ
S-YOU-GA 展	1,116	9月17日-9月22日	5	芸術地域デザイン学部(西洋画教室)/崇城大学芸術学部(洋画コース)	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ
ダイアログ・イン・ザ・ダーク佐賀2016	781	9月30日-10月9日	8	佐賀県/特定非営利活動法人ダイアログ・ジャパン・ソサエティ	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ
国際大学折紙連盟(ICOA) 作品展	2,808	10月14日-10月30日	15	折紙探偵団九州友の会/国際大学折紙連盟(ICOA)	スタジオ
第7回 環友会展	991	10月18日-10月23日	6	環友会	ギャラリー1、ギャラリー2
平成28年度 JA 共済小・中学生 第52回書道・第42回交通安全ポスターコンクール	1,587	10月27日-11月3日	7	農業協同組合/全国共済農業協同組合連合会佐賀県本部	ギャラリー1、ギャラリー2
第5回 佐賀大学コンテンツデザインコンテスト 特別企画日本アニメーションの過去・現在・未来	2,580	11月8日-11月19日	11	佐賀大学コンテンツデザインコンテスト実行委員会	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ、小展示室
第58回 総合展	1,752	11月24日-12月4日	10	佐賀大学芸術地域デザイン学部	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ、中庭、小展示室
第57回 佐賀県学童美術展	2,956	12月13日-12月18日	6	佐賀県造形教育研究会	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ
Sブリュット公募展 もうひとつのものさし展	899	1月7日-1月15日	8	社会福祉法人はる	小展示室
第32回 佐賀県高等学校美術教師作品展 第6回 高校美術生徒作品展「これが高校美術だ!」	735	1月18日-1月22日	5	佐賀県高等学校教育研究会芸術部会美術部会	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ
第41回 佐賀県高等学校書道教師書作展	1,020	1月25日-1月29日	5	佐賀県高等学校教育研究会書道部会	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ
第57回 佐賀県学童美術展児童生徒立体作品展 第48回 佐賀市教職員美術展	1,267	2月3日-2月10日	7	佐賀市教科等研究会図工美術部会	ギャラリー1、ギャラリー2
第61回文化教育学部美術・工芸課程 卒業制作展 第23回教育学研究科美術 修了制作展	2,630	2月17日-2月26日	9	佐賀大学文化教育学部/佐賀大学大学院教育学研究科	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ、小展示室
佐賀大学デジタル表現技術者養成プログラム 第7期生修了作品展「電脳芸術展」	719	3月2日-3月5日	4	佐賀大学クリエイティブ・ラーニングセンター	ギャラリー1、ギャラリー2、小展示室
佐賀大学大学院都市工学専攻・理工学部 都市工学科 修士制作・卒業制作展	920	3月4日-3月12日	8	佐賀大学大学院工学系研究科都市工学専攻/佐賀大学理工学部都市工学科	スタジオ
久富邦夫〈佐賀〉—創造の旅	4,191	11月25日-3月25日	95	佐賀大学美術館	特別展示室 ※観覧者実数
田中嘉生教授 退任記念展	1,402	3月15日-3月25日	10	田中嘉生教授退任記念展実行委員会/佐賀大学芸術地域デザイン学部	ギャラリー1、ギャラリー2、スタジオ

平成28年3月21日～平成29年3月25日

[年度別入場者実績]

※数値に重複なし

	入館者数	うち有料入館者数	開館日数
平成25年度	27,167	0	125
平成26年度	40,780	2,652	254
平成27年度	37,965	0	278
平成28年度	38,474	0	291

久富邦夫をめぐる
ふたつの企画展

2016
—「修業」と「創造」

佐賀大学美術館
紀要

久富邦夫をめぐるふたつの企画展

—「修業」と「創造」

大坪 由季

元 佐賀大学美術館 学芸員

はじめに

久富邦夫は日展、一水会などで精力的に発表を続けていた画家である。その一方、佐賀師範学校で教鞭をとり、今日に至る佐賀大学の美術教育の基礎を石本秀雄とともに作ってきたひとりでもあった。また「西虹会」は、佐賀から中央へ負けない人材育成を目的として発足され、久富はその佐賀画壇の発展にも助力をしていた。

久富邦夫は石本秀雄とほぼ同時期に佐賀大学で西洋画を教えていながらも、これまで彼を取り上げた展示があまり行われておらず、画業やその生い立ちが謎に包まれている。調べてゆくと、青年期から晩年にかけて大きく異なる作風や、交友関係に興味を持ち、佐賀大学美術館では平成28年度に「久富邦夫〈東京〉—太宰と出会った修業時代」（2016年3月21日－7月10日）、「久富邦夫〈佐賀〉—創造の旅」（2016年11月25日－3月25日）の二つの展示の企画・担当を行った。展覧会開催にあたり、事前に遺族の快諾を得て貴重な資料や作品が眠るアトリエの調査及び、聞き取りの機会が実現した。展示に関しては本来ならば一度で久富邦夫の画業を紹介しておきたいところであるが、半世紀以上に及ぶ画業や、アトリエでの調査で分かってきたことを紹介するにはスペースに限りがあるため、前期と後期の二つに展示を分け、画業人生の補完を図り、久富邦夫の画家としての視点、教師としての視点、そして家族・友人らの関係を軸に久富邦夫の人物像、作風の変遷や制作のプロセスを辿った。

本稿では、前述の両展に出品した作品をいくつか取り上げると共に、変化していった久富邦夫の制作、彼に影響を与えた人物たち、そしてアトリエの調査や遺族の聞き取りの中で見えてきた久富邦夫という人物像についてまとめておきたい。

同郷の師との記憶

久富邦夫は1912年（明治45年）、父清六、母レキの間に久富家次男として佐賀市に生まれる。父は久富が1歳の時に亡くなり、女手一つで育てられた。久富は幼い頃からすでに絵が好きであり、中学卒業の年に佐賀美術協会洋画研究所へ入る。その頃から佐賀や福岡の各地を写生している。

20歳になると母と共に上京し、帝国美術学校（現・武蔵野美術大学）、鈴木千久馬洋画研究所を経て、応召まで東京で過ごした。当時、安井曾太郎、梅原龍三郎らが昭和期の洋画界の双壁をなしていた時代であり、画学生だった久富も自然と安井の《外房風景》に惹かれ、外房州へ行き白い樹木を写生している。また、日劇ホールで開催された福島コレクション展で観たピカソ、マチス、ルオー、モディリアーニ、ユトリロなど、戦前に本物の作品を見る機会が少なかった久富にとっては、おおいに刺激になったといえる。¹

ところで、安井やピカソら以外にも若き画家に大きく影響を受けた人物がいた。それは同郷出身の北島浅一（1887～1948）である。当時、久富が下宿していた西荻窪の近くに北島が住んでいたとされ、よく彼のアトリエを訪れては指導を受けていた。

この《山麓のK先生》（fig. 1）は北島と共に富士河口湖に行った時に描いたものであり、“K先生”は北島を指す。富士山を背景に写生をする北島を低い視点から描き、粗めのタッチではあるが、写生に夢中になっている師匠の様子を捉えている。また、単独では青森、宮城、千葉、静岡など、様々な場所を訪れて写生をしており、精力的に活動している。

さて、北島浅一との関係は1933年頃から始まるのだが²、当時の絵日記によると学校帰りにアトリエを訪れ指導を受けた事や、旅行準備の手伝いに立ち寄ることがあったようである。下関経由で朝鮮半島方面に写生旅行へ出発する時には、駅まで見送りにゆき、無事を祈る記録も残されている。この時駅には北島の家族もあり、この様子から久富は北島とは家族ぐるみの付き合い



(fig. 1) 《山麓のK先生》1939年

이었다であろう。

これらの他にも、北島のアトリエにモデルを呼んだ際、久富を度々参加させていたようである。以下は北島が亡くなった時に、当時を回想して新聞に綴った言葉だ。

…〈前略〉上野の宮崎というモデル屋から、ときどきモデルが来ていた。先生は、絵仲間の友人たちと一緒に絵をかきになることもあり、私が、はじめてヌードの油絵を描いたのも、そんな場合であった。〈中略〉モデルは、体格のいい娘さんだった。高橋という山形の人で、名はトラさんといった。都会の色に染まらない純朴さで、けんめいにポーズをとっていた。私は、ご来迎を拜むこちで、高橋トラ像を八号の画布に描いた。ⁱⁱⁱ

絵に対峙し、思考を巡らせ、師や友に恵まれ充実した日々。だが、それも長くは続かなかった。戦争が始まり、久富は応召を余儀なくされた。

故郷佐賀での転機

久富は応召されると、鹿児島へ行くこととなった。東京での生活を中断せざるをえなくなり、家族は一足先に佐賀へ移る。まもなく終戦になると、家族が待つ佐賀で生活の基盤を再構築した。

終戦の翌年、久富にとって大きな転機となる出来事がある。佐賀玉屋で開催された「郷土作家油絵展」（1946年11月30日～12月6日）（fig. 2）に招待され、6点の小点を出品したのだ。郷土作家油絵展には石本秀雄、江崎元、田中太郎、筒井茂雄、納富進、武藤辰平、山口亮一、久富邦夫と8名が出品していた。終戦直後の鬱屈とした霧を晴らすかのように、開催2日目にして来館者は5000人を超え、類を見ないほど大盛況であった。当時の様子を「オーバーな気もするが、私は観衆の後ろから背伸びをしながら（会場を）見てまわった。」^{iv}と追懐している。

1946年（昭和21年）12月4日付の佐賀新聞には、同展の熱が冷めぬうちに新聞社の計らいで、出品者8名による座談会が設けられた。

これによると、山口亮一は展覧会が大盛況したことについて「美というものに飢えていますね、戦時中にこうした催しがなかったから若い人たちが押しかけてきたんです。」と述べている。これに対し久富は「今まで佐賀は軍人とか役人とかを出すのに力をいれ美術家が育たなかった。これからウンと文化のレベルを上げないと駄目です。」と語り、佐賀の文化芸術への再認識と必要性、美術家を育成する場の確保、佐賀の芸術の現況とこれからについて討論している。

当時はまだ、公募展といえば佐賀美術協会展のみであったため、まだまだ敷居も高かったのだろう。若い世代が力試しをする新しい公募展を望んでいた。

1949年（昭和24年）、石本秀雄、江崎元、立石春美、筒井茂雄、納富進、久富邦夫6人の手により結成された「西虹会」は佐賀の若い人材育成、そして登竜門的な要素もあっただろう。また、審査を公開審査としている。これは前述の座談会でも語られていたのだが、若者にこれから必要な批判力を養う力を育てたいという意図が含まれていたのではないかと見える。そういった意味では、多くの人の目に触れる公開審査は、様々な意見をその場で聞くことができると同時に、自身の作品に対しても客観的視線で受け止められ、非常に有効的な方法だったと考えられる。

「西虹会」は結成された1949年（昭和24年）に第1回（fig. 3）を迎え、1956年（昭和31年）まで続いた。後にその役割は昭和26年に始まる「佐賀県展」に受け継がれてゆくことになる。



(fig. 2) 「賑わう“郷土作家油絵展”」
佐賀新聞、1946年12月3日、p. 2



(fig. 3) 「第1回西虹会ポスター」
1949年（画像提供：唐津市近代図書館）
※原資料は久富家

石本秀雄との出会い

久富の転機にもう一人欠かせない人物がいる。それは石本秀雄（1908–1986）であり、彼も同じく郷土作家油絵展に出品していた。久富の作品が石本の目に留まり、この出会いを機に1947年（昭和22年）から佐賀師範学校、佐賀大学教育学部で素描や西洋画を教えることとなった。だが、当初は気が進まなかったようで、家まで訪れた学校関係者の目を盗み、「先生にはなりたくない。」と裏口から田を突き抜け逃げていたそうだが、教授になると多くの学生に親しまれる兄貴的な存在となっていった。

自宅兼アトリエは、家族が掃除であっても、許可が無ければ立ち入ることができなかった場所であるが^{vi}、久富を頼ってくる学生、絵描き仲間らは頻繁に出入りしていたようだ。久富は指導の傍らで日展、一水会に出品を重ねていた。

石本秀雄の《画家の家族》は、後に日展特選となり代表作の一つである。1951年（昭和26年）のある夏の日、久富は小城市にある石本のアトリエを訪ねる。アトリエのイーゼルに立ててあった大作《画家の家族》を見て、「これまでの作風を吹っ切った色と形の明快さは、まさに清風至るとでもいえよう。狭い画室に、そびえ立つような気骨を示していた。」^{vii}と作品に対峙した時の印象を語っている。久富が1958年（昭和33年）に発表した《絵のある部屋》（fig. 5）は、どこことなくあの《画家の家族》を彷彿とさせるという見解もある。^{viii}

石本に劣らず、久富も教師と画家を両立しながら奔走していたが、特に石本の特別教科（美術・工芸）教員養成課程（いわゆる「特美」）の設立に向けて尽力するエネルギーの様子や、制作に対する姿勢を見て、久富はおそらく傾倒していただろう。身近な存在だっただけに影響を与えていたようである。



(fig. 4) 佐賀大学校舎前にて

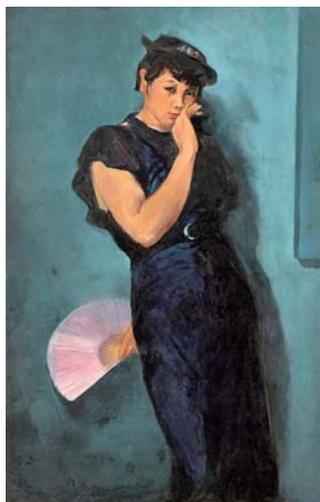


(fig. 5) 《絵のある部屋》1958年

写真を用いた制作と実験的なエスキース：パステーション

ここでは、久富自身の制作について述べていきたい。学生時代、久富はまだ普及していなかった写真機を使い、たくさんの人物を撮影していた。アトリエには友人との一コマや、作品のモチーフになる人物が残されていた。その中にはこの《扇》（fig. 6）と非常に酷似した写真が見つかった（fig. 7）。この頃から写真を見ながら描くという手法を実践していたということがわかる。また、複数枚の写真から一つの作品を制作するという方法は晩年でよくみられ、《扇》がその発端の一つであったといえよう。

写真を制作する上で一つのツールとして用いるわけだが、空気感も含め被写体を完全に再現できる写真が生まれたことで、西洋絵画の写実的要素の必要性や、写実が写真に取って代わり得る可能性を懸念しつつも、写実絵画は人間の視覚、思想を通して生み出されるものであり、それが無い写真は似て非なるものである。以下は「今日の視覚」と題し、新聞に綴った言葉である。



(fig. 6) 《扇》1940年



(fig. 7) 《扇》の参考写真

…〈前略〉作者の思想感情と作品の距離は、最短距離を選ぶ方が、作者の意図は明確となる。作者と作品の最短距離をつなぐもの、それが視覚である。〈中略〉洋の東西を問わず、このように新しい視覚は、新しい美の創造と、過去の美の再認識という二つの方向性にわたって現在、活発な動きを示している。ただ、この過去の美への関心が、新しい美に対する無関心から起きてくる現象で無ければ幸いである。^{ix}

《扇》が発表されてから10年、身の回りの環境が大きく変わると同時に久富の作風も変わりつつあった。それまで写実的な表現をしてきたが、写真を用い、エスキースの段階で実験が始まる。また同時期に、久富の息子たちが誕生し、可愛い盛りであった。彼の作品には、この息子たちが登場し始める。それはまるで父親が日々変化する我が子の成長を描き留めるべく、キャンパスに記録しているようにも見える。先ほどの《絵のある部屋》(fig. 5)をみると、一見同じ空間に母と子がいるように見えるのだが、これは全く違う場所、人物を組み合わせていることがわかった。きっかけは久富のアトリエを調査させていただいた時に出てきた一枚の写真である(fig. 8)。この写真は、子供達が自分たちで描いた鬼の面をかぶり、椅子に座っているところを撮影している。遺族への聞き取りによると、父である久富は度々子供達にポーズを取らせ、時には指導が入ったという。また、画面の女性は久富の妻でないことから、この女性はモデルではないかと推測される。



(fig. 8) アトリエでの制作の様子



(fig. 9) アトリエでの制作の様子



(fig. 10) 《祭の日》1974年
第6回改組日展

さらに描き方も大きく変化した。これまでの写実的で陰影から空間を作り出す技法から、線と面を用い、力強い輪郭線で対象の描写を際立たせている。このように写真と現実をバスターシユさせ、新たな世界観を生み出している。さらに同様の手法を用いている《祭の日》(fig. 10)では、少なくとも3枚の写真を用いていると推測される(fig. 11, 12, 13)。完成された作品は祭りが終わった後だろうか、肩車された稚児の側で草履を持った老人が佇んでおり、画面の中の登場人物らが親族かと匂わせるような構成になっている。一見ストーリーが浮かび上がってきそうだが、制作で参考にしたとみられる写真を見ると、全てが別のシーンを切り取っていることがわかる。



(fig. 11) 《祭の日》参考写真



(fig. 12) 《祭の日》参考写真



(fig. 13) 《祭の日》参考写真

ところで、この《祭の日》のような郷土の芸能をモチーフにした作品は1970年代によくみられた。きっかけのひとつとして、1948年（昭和23年）に創刊された郷土の文化を中心に紹介する佐賀の総合文化雑誌「新郷土」がある。この雑誌には石本や久富をはじめとした佐賀大学「特美」の教授陣などが表紙を飾っている。その中で久富は表紙をはじめ、挿絵、時には随筆を寄稿している。雑誌内には文芸や文化財、歴史、佐賀に生息する野鳥など、幅広い分野が取り上げられており、その中に郷土芸能もあった。久富はその挿絵や、時には祭りについての随想も書いている。

《祭の日》のモチーフとなっているのは佐賀市川久保にある白髭神社の稚児田楽⁶であり、現在でも毎年10月18日、19日に執り行われている豊作を祈念する行事である。

写真を用いた制作と実験的なエスキース：コラージュ

遺族による聞き取りを続けると、久富は休日になるとよく画材道具片手に自転車です佐賀の風景をよくスケッチしていたという。アトリエには大量のスケッチブックが残されていた。その多くはごく普通の生活の一部を切り取ったものであり、私たちがよく目にしてきた光景である。田植えの様子、開発が進む風景、アトリエの窓から見える田園の移ろい、等々。

そして描かれたスケッチやエスキースにはさらに手が加わる。ここで使っていたのは雑誌の写真をストックしていたものである（fig. 14, 15）。久富はこうしたスクラップや、着色をした画用紙を集め、全体のバランスを見ながら切り貼り、一つのエスキースを完成させる。時には雑誌の服だけを切り取り、人物に着せるといったことも行っていたようだ。ディテールを何度も変え、これを繰り返している。

佐賀大学を退職すると制作はより一層加速し、公募展に出品する大作が多かったが、隔年のペースで個展を開催し、小点も多く制作するようになる。その頃になると風景画の割合が多くなっていく。この変化について自身の制作意図はほとんど語られていないが、唯一残された肉声によると画業人生について回顧しながら「（人物を多くモチーフにしていたことについて）特別な意味合いという程のものはないんですけど、やっぱり人間というものに対して大変興味がありましてね、人間を扱っているのが面白いものですから、自然とそういう風になりました。（若い時から現在にかけて作風が変化したことに対し）若い時は夢中で描いてて、少し絵が分かり始めると理屈があったものを描いたりしましてね、それを通り越すと、自由に気ままに描くというふうな…そういう風な違いがあるようです。（今後の制作活動について）別に気張ったのを描くっていうものはないんですけどね…まあ、自由に気ままに自分の好きな絵を描いていく、その程度のものですよ。」³¹と述べている。

久富は亡くなる前年まで筆を持ち続けた。それは創造者としての性と言えるのかもしれない。絶筆となった《しあわせなら手を》（fig. 16）には、自身の死期を悟りながらも戦う彼の力強さが感じられる。死の淵にある覚悟と、思想が入り混じる不思議な世界観になっている。

最後に、故郷佐賀について語る久富の言葉がある。それほどまで彼は佐賀に魅せられ、愛してやまなかったのだろう。

「市の中心地で育った私だが、思い出の中にまで田園の姿が浮かびあがるのも、佐賀が田園の中の街だった故だろう。戦後、宅地化もされたと云え、市内にはまだいたるところに田園があり、昔の風物を疎している。それらがかもしだす牧歌的な田舎街の感触が私は好きである。〈中略〉市内で好きな場所は、県庁一帯のほりばた。水。それも、動くバスの窓から見る眺めが、ゆらゆら水がゆれて一段と魅力的である。そして人間までがその風景の中では、生き生きとくる。」³²



(fig. 14) エスキースと雑誌の切り抜き



(fig. 15) 《道》エスキースのための切り抜き



(fig. 16) 《しあわせなら手を》2009年
第71回一水会

おわりに

ここまで佐賀大学美術館で開催した「久富邦夫〈東京〉—太宰と出会った修業時代」、「久富邦夫〈佐賀〉—創造の旅」での作品を取り上げつつ、久富邦夫の制作、彼に影響を与えた人物たちについて論じた。そして、アトリエでの調査や遺族の聞き取りの中で今回明らかとなった事柄をまとめてきた。制作をする上での写真の活用や、実験的なエスキースからは、写真という媒体をなんとか乗り越えようと模索する一面も垣間みることができた。その一方で教鞭をとりながら、佐賀の文化芸術の発展や人材育成に注力することに奮闘している教師の姿もみえてきた。本稿で論じているのは、久富邦夫の半世紀以上にのぼる画業人生のごく一部に過ぎない。これに対してはさらに調査が必要だろう。

(元佐賀大学美術館 学芸員)

最後に、「久富邦夫〈東京〉—太宰と出会った修業時代」、「久富邦夫〈佐賀〉—創造の旅」において、久富邦夫に関する写真や原稿資料の多くを寄贈、及び調査を快く協力をいただいた久富家に改めて深く感謝いたします。

〈註〉

- i 原稿「飄飄踉蹌の記」。
- ii 「久富邦夫画集」久富邦夫画集刊行会、1985年、年譜より。
- iii 久富邦夫「北島先生と私」佐賀新聞、1986年10月10日。
- iv 「第80回佐賀美術協会展記念誌1997」80回展記念誌編纂委員会、1997年、p. 11。
- v 久富香久子氏からの聞き取り。
- vi 遺族からの聞き取り。
- vii 原稿「石本さんのこと」。
- viii 展覧会「佐賀の美術教師たち—地方画壇の成立と美術教育者」佐々木奈美子氏によるギャラリートークより、2016年5月28日。
- ix 久富邦夫「今日の視覚」佐賀大学新聞、1956年10月31日。
- x 白髭神社の稚児田楽は2000年に国の重要無形民俗文化財に指定された。
- xi 「STS ニュースレポート」での発言、サガテレビ、昭和60年3月20日放送。
- xii 原稿「わが故郷」。



佐賀大学美術館

平成28年度

年報＋紀要



2017年11月30日発行

発行 佐賀大学美術館 ©2017

佐賀市本庄町1番地

企画・編集 佐々木奈美子＋鬼塚美津子＋今村真由美 (佐賀大学美術館)

編集協力 枝國武司＋西村彰＋出口智佳子 (佐賀大学美術館)

印刷 株式会社 昭和堂

※本書の仕様は、「平成25年度年報＋紀要」(デザイン:佐賀大学文化教育学部 荒木博申教授)を踏襲した。

佐賀大学美術館



THE SAGA UNIVERSITY ART MUSEUM